



いのちは見えるよ

及川和男著

ルミさんは、全盲で盲学校の先生。その出産に立ち会ったお隣の女の子エリちゃんは「いのちは見える」という言葉に心を動かされます。やがて、ルミさんは学校に招かれ、みんなは、赤ちゃんをだっこさせてもらって…。全盲のお母さんの出産と懸命な子育ての様子を描き、「いのち」の大切さについて対話し考えていきます。

んがわらうかお母、うんちのようすも。ふしぎだな。何でわかるんだらう。
お母さんが子どものごころ、となりの家のマッサージのおじさんも、目が見えないのに足音でだけかあてたり、花の色を知っていたりしたんだって。
すごいな。ふしぎだな。

わたしは、「どうして見えるんだらう」とかんがえてみたよ。きつとそのおじさんも、ルミさんも、目のかわりに心でいろいろなものを見てるんだよ。心をいっしょうけんめいつかえば、どんなものでも見えるかもしれないね。

わたしには、十才以上はなれたお兄ちゃん二人とお姉ちゃんがいるよ。わたしが生まれた時から、ずっと大せつにしてくれるの。もしかしたら、いのちって、ないたり、わらったりして心をつかって生きることなんじゃないかな。目では見えないけど、じ分のいのちも人のいのちも、大せつにしなくちゃいけないね。
わたしは、これから、やさしい気もちをわすれずに、友だちやまわりの人を大せつにしたいよ。

ぼくたちはいつまでも

関谷ただし著



ぼくは、田淵安彦、4年生。みんなより太ってるから、ブッチー、ブッチーってかわれている。そんなぼくが、二期の席がえて、車いすの神山くんと同席になった。神山くんは、筋肉がちぢんでだんだん力がなくなっていく病氣だという…。心温まる少年時代の友情を描いた物語。

でもね、さっちゃんは、「ゆびがない手なんていやだ」とないたけど、お父さんとお母さんは、やさしく「ゆびがなくても、さっちゃんのだいじな手だよ」と教えてあげたんだよ。さっちゃんのお父さんは、さっちゃんと手をつなぐと、ふしぎな力がもたらえるんだって。ほんとうにそうかもしれない。だって、さっちゃん、ゆびはないことをよくよくよしない、元氣にようちえんに行つて絵をかいたり、

ぼくがラーメンたべるとき

本川根小学校二年
大村拓夢



ぼくは、ラーメンが大好きだよ。ラーメンを食べている時は、しあわせな気分になる。ラーメンを食べているひょうしの絵がおもしろそうだったので、この本を読む前からわくわくしていたよ。
でも、読んでいくうちにだんだんかなしい気もちになったよ。どうしてかなしい気もちになったのかな。ちよつとかんがえてみたよ。
この本の男の子が、ラーメンを食べているとき、となりの子は何をしているのかな。そのまた、となりの家の子はどうだろう。おなじ時にみんなが何をしているのかな、ということが、この本のお話になっているよ。そして、となりの国やまたそのとなりの国

ぼくがラーメンたべるとき

長谷川義史著



ぼくがラーメンをたべているとき、となりのみっちゃん、何をしている?となりの国の子は、何をしている…。同じ時間に生きる世界の子どもたちは、今、どんなことをしているのだろうか?どんな場所にも、まっすぐに立ってほしいと、人気絵本作家・長谷川義史が世界の子どもたちの一瞬を切り取りました。

ぼくたちはいつまでも

中川根第一小学校四年
秋元宏太



この本を手にとった時、表紙に車いすの男の子の絵がのっていた。そんな男の子が気になってこの本を読み始めた。
田ぶち安ひこ君は、四年生で体重が五十キロもあるという。ぼくは、やせっぽつちなのでうらやましく思った。
ドッジボールが苦手な田ぶち君には、「ブッチー」というあだ名がついている。でもブッチーはこのあだ名がきらいだった。ぼくがブッチーだったらやっぱりこんなあだ名はいやだろうなと思った。ブッチーは、ドッジボールだけでなく走るのも苦手だった。そしていやいやドッジボールをやっている時に、声をかけてくれたのが車いすに乗った神山君だった。神山君は、手や足のきん肉がちぢんで力がだんだん出なくなる病氣だったので、車いすに乗っていた。神山君は車いすの生活だったが、いつも気持ちは前向きだった。ぼくが車いす生活だったら、学

というように、どんどんお話がひろがっていくんだ。外国までつづいていくのがおもしろかったのに、さいこの国の男の子が、一人ぼつちでたおれているのを見たら、とてもかなしくなった。

いつも、なかよしの友だちといっしょにあそんだり、おいしいものをすぐ食べたりすることができるぼくは、すごくしあわせだと思ったよ。

となりの国やせかい中には、あそぶことやおいしいものを食べるができない子どもたちがたくさんいるのかな。

この本の中に、男の子がラーメンをおいしそうに食べているのに、遠い遠い国では、男の子がたおれている場所がある。ぼくは、そのおいしそうなお話を、たおれている人にわけてあげたいとすごく思ったよ。

ぼくたちは、おなじ時間を生きているのに、生まれた場所がちがうだけで、生活がこんなにちがうなんて、ふこうへいだと思ったよ。ぼくが大人になって、ラーメンを食べているとき、せかい中のみんながしあわせになつてほしいな。

さっちゃんのまほうのて

本川根小学校三年
鈴木綾馬



ぼくは、この本のだいい名を見て、「さっちゃんの手は、どんなすごいまほうの手でできているのかなあ。まほうが使えるなんていい

校なんて行つても楽しくないと思うし、「なんでぼくだけ車いすなんだ」といじけてしまうのではないかと思った。やっぱり神山君は強いなと思った。
ある日ドッジボールなんてどうでもいいと思つているブッチーに神山君が、「勝負は負けちゃだめなんだよ。ゲームなんだから真剣にやらなきゃ相手に悪いよ」と言った。ぼくはこの言葉を読んで、スポーツ少年だんやつているサッカーの試合を思い出した。試合中、どうせ負けると半分あきらめている時があった。それじゃだめなんだと神山君の言葉にはつとした。

きつと、神山君は自分が動けなかった分、ブッチーにがんばつてほしかったんだと思う。
次の日のドッジボールはすすごかった。ブッチーは、すごいスピードでとんできたボールをおなかの真ん中で受け止めたのだ。それを見ていた神山君が、ガッツポーズをとった。神山君の言葉がブッチーにもとどいたんだとうれしくなった。
六年生になり、病氣が悪化した神山君は天国へ行つてしまった。でもブッチーは神山君にたくさんの事を教わった。弱虫でいつもだれかのせいになり、逃げることばかりして助けを求めることしかしなかったブッチーに、「自分でなんとかしなきゃ生きていくかいないじゃないか」と神山君は教えてくれた。

ぼくも思った。何か苦しい事があつても、逃げる事ばかり考えてはだめだ。まずは自分でなんとかしなきゃいけないんだ。これからまだ、たくさんの苦しいことにぶつかるかもしれない。そんな時、神山君の言った言葉を思い出してがんばろうと思った。そして友達を大切にしようと思った。



さっちゃんのまほうのて

たばたせいいち著

幼稚園児のさっちゃんの手には生まれつき指がありません。それでも、さっちゃんはとても元氣。しかしある出来事によって心に傷を負ってしまいます。でも、友達や赤ちゃんの誕生の中で、しだいにゆっくりと立ち直っていきます。お父さんとお母さんの豊かな愛情に、いろいろなことを教えられる一冊。

なあ」と思つたけど、そうではありませんでした。

ふしぎなまほうが使えるのではなくて、さっちゃんの手は、生まれつきゆびがなかったんだよ。ぼくは、とつてもびつくりしました。ゆびがないって、どうするんだらう。ぼくも、まわりの人たちも、ゆびがない人はいないから、考えたこともありませんでした。ぼくには、手も足もゆびがあつて、当たり前だと思つていました。

毎日の生活でゆびを使わないことなんてないくらい大切なゆびだけど、もし、ゆびがなかったら顔をあらう時、ボタンやチャックをする時、てつぽうであそぶ時、野球、おり紙、当たり前毎日できることができなかったら、ぼくならかなしく、お母さんや人にたよつてやつてもらつたりして、あまえてばかりだと思ひます。

さっちゃんは、ようちえんで、ままごのお母さんやくをどうしてもやりたくて、その日、はりきつて出かけたよ。だけど、友だちのみんなが、「手のないお母さんはへんだよ」と言いました。たしかに、ぼくのお母さんは、せんたくや、お料理、子どもの世話、そうじ

ローザ

中川根南部小学校五年
河野実里



ローザは、アメリカのモンゴメリーといつところのデパートで、服の仕立てや修理の仕事をしている黒人の女の子です。いつもまじめに働いている、うでのいい職人でした。

十二月のある日、ローザは仕事が早く終わり、家に帰ろうとバスに乗つた時のことです。バスの中は黒人の席と白人の席に分けられていて、中間はどちらがすわつてもいい席でした。ローザは黒人の席が満員だったので、中間の席にすわりました。いくつかバス停をすぎて中間の席に黒人がいっぱいになつてきた時、運転手のどなり声がありました。「席を白人にゆずりなさい」。黒人の人たちは席を立ちました。でもローザは、席を立ちませんでした。

ローザ

ニッキジョヴァンニ著



公民権運動の母として、アメリカの歴史の中でもっとも有名な人物の一人であるローザ・パークス。彼女の静かな決断が、やがて全米を動かす大きな運動を引き起こした。時代を超えて、すべての人々に夢と希望を与えるノンフィクション本。2006年度コルデコット賞銀賞、2006年度コレッタ・スコット・キング賞受賞作。